

# 欠

唇を動かしかけてゐたと思つたが、丁度その時、雞が曉の時をつくつたので、急に彼等の視界から消え失せたといふ事等である。

若い王子は彼等の話をきいて不思議な事だと屹驚した。それは如何にも矛盾がなく、よく辻褄が合つて居たので、信じない譯には行かず、彼等の見た幽霊はきつと父の幽霊であると思ひ定め、それを見る機会を得るために、其の夜兵士達と一緒に見張り番をしようと決心した。といふのは、さうしたものは故がなく現はれるものでなく、幽霊は何か話したい事があり、これまでは黙つて居たとしても彼に向つては何か話すであらうと考へたからであつた。そこで彼は夜の來るのを待ちもどかしく感じて居た。

夜が來ると、彼はホレイシオ及び番兵の一人であるマアセラスと共に、幽霊がいつも歩いたと云ふ露臺にその持場を定めた。その夜は寒く空氣は濕つぽく冷たかつたので、ハムレット、ホレイシオ及び番兵のマアセラスは、夜の寒さの事で何か話を始めたが、それは、幽霊がやつて來るといふホレイシオの言葉によつて、急に中止された。

父の幽霊を見ると、ハムレットは急に驚きと恐怖に打たれた。彼は最初彼等を護り給ふようにと天使や守護神の名を呼んだ。といふのはそれは善き靈であるか、惡靈であるか、またよい目的のために出たのであるか、また悪い目的で出たのであるか分らなかつたからである。しかし追々に、彼は強い



1時 2時 3時  
ハムレット

て勇氣を鼓舞した。そして彼の父が（彼にはさう見えただのである）如何にも情深さうに彼を眺め、恰も彼と話をしたいと望んで居るようであつたし、またどの點から見ても、ありし日の父にあまりによく似て居たので、ハムレットは彼に言葉をかけざるを得なかつた。彼はハムレットよ、王よ、父よとその名を呼び、それから、何故に安らかに休ませた墳墓を立ち出で、再び此世を月光のもとに訪られるのであるかその理由を語り給へと訴へ、またその靈に平和を與へるようにするのに、彼等の力で何か出来る事があるかどうか知らせ給へと哀願した。

すると幽靈は、二人きりになるためどこかもつと離れた場所にハムレットを連れて行かうとするように、彼を手で招いた。ホレイシオとマアセラスとは彼が幽靈に従つて行くのをとめたかつた。といふのは、彼等は、近くの海か又は何處か恐ろしい崖の頂かに彼を誘ひ行き、そこで王子の正氣を奪ふやうな怖ろしい姿を現す何か悪い靈ではないかと心配したからである。しかし彼等の忠告も歎願も王子の決心を翻させる事は出来なかつた。彼はそれを失ふ事を懸念する程生命をありがたいものだと思つて居なかつた。彼の靈魂に關しては、それは幽靈同様不死のものであるから、幽靈がどうする事が出来ようぞと彼は云つた。そこで獅子のやうに勇ましい氣持になり、彼を止めようと全力を盡す彼等をふりきつて幽靈が導く方へと従つて行つた。

さうして、幽靈と彼と二人きりになつた時、幽靈は沈黙を破り、彼は、ハムレットの父の亡靈で、

無残に弑殺されたのだと云ふこと、及びどう云ふ風にしてこれが行はれたかと云ふ事を告げた。即ちその弑殺は、ハムレットがすでに疑すぎる程疑つて居たやうに、彼の妻と王位とを得ようといふ目的から、彼自らの弟、ハムレットの叔父の手によつてなされたのである。彼が園の中で眠つて居る時、それは彼のいつもの習慣で午後の事であつたが、無道な弟は、眠つて居る彼の許に忍び寄り、毒草沃沃<sup>アポロ</sup>の液を彼の耳に注ぎ入れた。それは人間にとつては致命的なものであるから、水銀のやうに體中の血管をめぐり、血液を凝結させ、皮膚一面は癩病のやうに固くするのである。かく眠つて居る間に彼は弟の手によつて、一時に王位と后と生命とを奪はれたのであつた。それから彼はハムレットにも、し父を愛するならば、この非道な暗殺の復讐をして呉れと懇望した。又亡靈はその子に向つて、妻が婦徳を失ひ、彼女の結婚による愛に背いて、彼を殺した男と結婚するやうになつた事を悲しんだ。然し彼はハムレットに、邪惡な叔父に對しては如何なる復讐の手段をとらうとも、母の身には決して如何なる害も加ふる事なく、天の罰し給ふに任せ、良心に苛責せらるゝのを待てと注意した、でハムレットは亡靈の命令を一々まもることを約束すると、亡靈は消え失せた。

そしてハムレットがたゞ一人残された時、すべて彼の腦裏にある事、すべて彼がこれまでに本又は見聞によつて學んだ事は直ちに忘れて了ひ、亡靈が彼に向つて語つた事及び彼にせよと命じた事以外は何事をもその念頭に置くまいとかく決心した。そしてハムレットは亡靈と交した言葉は彼の親友



ホレイシオ以外のものには話さず、またホレイシオ、マアセラス兩人にその夜彼等が見た事は極秘にせよと命じた。

幽霊を見た時、ハムレットの心に刻みつけられた恐怖は、前から身體も弱り、神氣も沮喪して居た際なので、殆んど彼の心の調子を狂はしめ、正氣を失はせた。それで彼は、かう云ふ状態が續きその結果として、人の注意を引くやうになり、又叔父がハムレットは自分に對して何事か謀らんで居るか、または父の死に關して自分が發表した以上の事を知つて居るのではないかと疑ふやうになれば、叔父も警戒を怠らぬやうになるだらうと懸念して、その時以來眞實眞正の狂氣であるやうなふりをしようと決心した。それに、もし叔父がハムレットは重大な事は何も企てる事が出来ないと思つて居るやうになれば、疑の目標となる事も少くなり、且つ彼の眞の心の錯亂も、伴つて狂氣のやうに装へば一番よく覆ひかくされて行くであらうと思つたのである。

この時以來ハムレットは、その服裝にも言語にも又舉動にもわざと一種の粗暴と奇怪とを示して、巧妙に狂人を装ふたので、王も王妃も共に欺かれ、亡靈が現れたと云ふ事は知つて居なかつたので、父の死に對するハムレットの悲しみが、かやうな錯亂を起させるに足る原因とも考へなかつたので、彼の病氣は戀のためだと断定し、よき相手を探し出さうと考へた。

ハムレットがまだ上に述べたやうな憂鬱に陥らなかつた頃、彼は王の國事顧問官長ボロウニアスの

娘で、オフエリアと呼ぶ乙女を大層愛して居た。彼は手紙や指輪を贈つたりして、又幾度も彼女に向つて愛情をあらはし、立派な態度で戀を求めた。そして彼女も王子の誓の言葉と熱心な願を眞と信じ居たのであつた。しかし王子は近頃憂鬱に陥つて以來彼女を顧みぬやうになり、又伴つて狂氣の様子をしようといふ計畫を胸に抱いた時からは、彼女に對して、不深切な又どこか亂暴なしむけをするやうなふりをした。だが彼女は、性質のよい婦人だったので、彼の不實をせめるといふよりはむしろ、眞底から不深切ではなくて、全く心の病のために、以前程やさしくして呉れないのだと強いて考へて居た。そして彼女は、かつては立派であつた王子の才能、すぐれた理解力が、今は王子をなやます深い憂鬱のために傷はれて居るのを、この上もなく微妙な音楽を奏し得るように造られては居るが、調子はづれにつき鳴らしたり、亂暴に扱つたりすれば、耳ざかりになる不愉快な音しか出さない巧妙な鐘にたとへた。

ハムレットの着手して居る手荒な仕事、即ち父を殺した人間に對してその復讐をしようといふ事は、愛を求むるといふやうな遊戯的な状態とは釣合はないものであり、又戀のやうな徒らな熱情を、今は彼にはさう思へたのであるが、さうした熱情を容れることを許さなかつたけれど、それでも愛するオフエリヤに對する優しい思が現れて來るのをどうする事も出来なかつた。かうした時、彼はこの優しい婦人に對するこれ迄のしむけがあまりに辛らかつた事を思ひ、押へられぬ熱情にみち、伴りの狂氣



にふさはしい誇張した言葉で手紙を書いて彼女に送つた。だがさうした文句の中にもやさしい愛情の現れて居るところがあつた。それがこの氣だてのよい婦人に、彼の心の奥底には未だ彼女に對する深い愛情がひそんで居るといふ事を示さないではをかなかつた。彼は彼女に、星が火で出来て居るといふ事を疑つてもよいし、太陽の天空をよぎる事を疑つてもよいし、又眞理は虚偽であるとさへ疑つてもよいけれど彼が彼女を愛して居るといふ事は疑つてはいけないといふ事をかき、更に澤山のかうした誇張の言葉を書き送つた。この手紙をオフエリヤは孝順にもその父に示した。すると老人は己の義務だと考へてそれを王と王妃とに告げたので、王と王妃は其の時以來、ハムレットの狂氣は全く戀がもとなつてゐるのだと思つた。そして王妃は、オフエリヤの美しさが幸にハムレットの狂氣の原因であればよいと思つた。と云ふのは王妃の考では、彼女の美德が都合よく彼をもとの状態に復させ二人の面目となり幸福となるかも知れないと思つたからである。

然しハムレットの病は、王妃が想像してゐるよりも、又そのようにして治癒され得るよりも、もつと深く根ざしたものであつた。彼が見た父の亡靈は常に彼の心につきまとい、彼を弑殺した人間に對して復讐せよといふ犯し難い命令は、それが成就される迄王子に安息を與へないのであつた。彼には一時間それを延ばせばその一時間が一つの罪であり、又父の命令をやぶる事であるやうに思はれた。しかし如何にして王を殺す事をし遂げるかといふ事は、王が斷えず護衛に守られて居るので、なかなか

容易な問題ではなかつた。又それが容易な事であつたとしても大抵は王と共に居る王妃、即ちハムレットの母が、彼の目的を達する障碍となつた。その障碍を彼は乗り越える事が出来なかつた上に、横領者が自分の母の夫であるといふ事情その事が、彼の胸にすまないといふ情を湧かせ、そして常に彼の大望の鋒先を鈍らせた。單に人間一人を殺すといふ行爲すらも、ハムレットのやうな天性やさしい氣質のものにとつては、すでに嫌でぎよつとする程の事であつた。彼の憂鬱とながら間隔つて居る元氣の沮喪とは、彼の目的をにぶらせて、逡巡させ、そのために彼は思ひ切つた行動をとる事が出来ないうちになつた。その上に彼は、彼が見た亡靈は本當に彼の父であるか、それとも、思ふまゝにどんな姿にでもなると傳へきいた悪魔、彼の體が弱くなつて居り又憂鬱に陥つてゐるのにつけ込んで、人殺しと云ふやうな極端な行動をさせるために父の姿となつて現はれた悪魔であるかも知れないと、幾分心に躊躇せざるを得なかつた。そこで彼は、心の迷ひによつて生ずるものであるかも知れない幻影とか幽霊とか云ふものよりも、もつと確實なよりどころとなる根據を掴まうと決心した。

彼がかうした決心のつかぬ心持で居る間に、或る俳優連が宮廷へやつて來た。ハムレットは以前彼等の芝居を喜んで見、殊に彼等の一人が、トロイの老ブライアム王の死を、その妃へキュバの悲嘆と共に、詳しく叙して、悲劇の物語を演ずるのを見る事が好きであつた。ハムレットは昔なじみの役者連が來たのを喜び、又かの物語が以前どんなにか好きであつたがを想ひ出し、役者にその物語を操り



かへしてきかせるようにたのんだ。でその俳優は、弱り果てた老王が無残に虐殺された事や、大火のために滅亡する彼の人民と市との事や、これまで王妃の冠を戴いて居た頭に情ない布片を戴き、王妃の衣をつけ居た腰には、あはて、取りあげた一枚の毛布以外には何物も著けないで、裸足のまゝで宮殿をかなたこなたへ走りまはる老王妃の狂氣のやうな悲嘆をつけ加へて、眼に見えるやうに物語つた。まことの光景を見て居るやうな真にせまつたこの物語は、そこに居た人々の袖を絞らせた許りでなく、俳優自身さへもときれ／＼の聲で、本當に涙を流して物語つたのであつた。それを見て、ハムレットは考へ始めた。もしあの役者が傳説にすぎない物語によつてあのやうに感動し、彼が見た事もない者の爲めに——幾百年の昔に死んだヘキュバの爲めに——泣き得るとすれば、憤起すべき實際の動機と理由をもつてゐる彼が、即ち眞實の王でありなつかしい父である人を虐殺されて居る彼が、殆んど感憤するところなくして、今迄その復讐を痴鈍な愚昧な忘却裏に眠らせて置いたとは、何と云ふ眞情のない事であらう！彼が俳優の事や演技の事や、また立派な演劇が眞に迫るやうに演出された時に観客に與へる偉大なる効果の事やを種々と考へて居た時、彼は舞臺で人殺しの場面をみ、その光景と類似した事情のためにひどく感動して、その場でその犯した罪を自白した、ある殺人者のあつた事を思ひ出した。そこで彼は、この俳優等に叔父の前で父の弑殺に似通つた芝居をさせようと決心した。そして自分はその芝居が如何なる効果を叔父に與へるかを綿密にみまもつたら、その顔つきから、彼が眞の

虐殺者であるかないかをもつと確實に知る事が出来るであらうと思つた。彼はかうした目的の劇を準備するように命じ、王と王妃とをその演劇に招待した。

劇の筋は、ヴェニナに於て一侯爵に對して行はれた殺害の事であつた。侯爵の名はゴンザーゴウと云ひ、その妻はパプティスタといつた。劇は、侯爵の近親であるルーシアナスと云ふものが、侯の身分を奪はんがために、どのやうにして彼をその庭園で毒殺したか、また殺害者は、暫らくの後、どのやうにしてゴンザーゴウの妻の愛を得たかといふ事を示すものであつた。

此の劇の上演に際して、王は、自分の爲に設けられた良だとは知らなかつたので、后と廷臣全部とを従へて臨御し、ハムレットは王の顔色を観察するため注意してその近くに席を取つた。劇は、ゴンザーゴウと其の妻との會話に於て、夫人は幾度も愛の誓ひをなし、又もし彼女がゴンザーゴウに先立たれても、決して再び夫はもたないと云ふ誓をして、若しも二度目の夫をもつやうな事があれば自分は呪はれるやうになれと願ひ、又それにつけ加へて、さやうな事をする女がありとすれば、それは必ず第一の夫を殺すやうな毒婦であると云つた。ハムレットは、王、即ち彼の叔父がこの言葉をきいて顔色をかへるのを見、又その言葉は王にとつても、王妃にとつても苦艾のやうに苦いものであるのを見た。しかし劇が進んで、ルーシアナスが庭園に眠つて居るゴンザーゴウを毒殺するために入つて來た時、故王、即ちわが兄を庭園に於て毒殺した彼の不正な所業に、それが如何にもよく似て居て、ひどくこ



の横領者の良心を苛責したので、彼は劇が終る迄その座に居る事が出来ず、突然彼の室へ燈火をもつように命じ、急病と伴り、否幾分かは病氣となつて、あはたゞしく劇場を去つてしまつた。王が立ち去つたので劇も中止されたが、ハムレットは幽霊の云つた言葉は眞實で、決して氣の迷ではなかつたといふ事を確信するに足る丈の事を見たのである。それで急に何か大なる疑惑を解決し得た人に起る愉快な氣持になつて、ホレイシオに向ひ、幽霊の言葉に千金を出してもよいと斷言した。しかし、たしかに叔父がわが父の殺害者であると云ふ事は分つても、如何なる復讐の手段を取るべきかと云ふ事に關してはまだ心に決定し兼ねてゐる矢先、彼は王妃、即ち彼の母から、祕かに話したい事があるから彼女の私室に来るようにとの迎へをうけた。

王妃がハムレットを招いたのは、王の希望によるもので、先達てのハムレットの行爲が如何に王及び王妃の氣嫌を損じたかを、王妃が王子に知らせるためであつた。王はこの母子の會見の際の言葉をすつかり知りたいと思ひ、また母親の情として報告があまり不公平になり、王の知らねばならぬ程に重大なものであるかもしれぬハムレットの言葉の或部分を略されるようになるかも知れぬと考へたので、老國事顧問官ポロウニヤスに命じて、二人の間に交される話を残らすきく事の出来る王妃の室の垂張のかけに身をひそませて居るように命じた。かうした事は、詭辯と權謀との中に育ち、間接な老獪な方法で、事の眞相を知る事を樂にして居たポロウニヤスの氣質に最もよく適した事であつた。

# 欠



欠

才  
セ  
口  
ウ



Hal  
Motikya hellas

ヴェニス市の富裕な元老院議員ブラバンシオは、デズディモウナと云ふしとやかな美しい娘をもつて居た。彼女は、多くの立派な徳を備へて居るのと、澤山の持参金があるのだらうと思はれて居たのとで、多くの男が争つて求婚した。然し彼女は、彼女と國を同じうし、顔色を同じうする求婚者の中に、愛し得るやうな人は一人も見いだす事が出来なかつた。それで此の立派な婦人は、人の容貌と云ふよりはむしろ心を重じて居たので、模倣すべき事と云ふよりは、むしろ感すべき事であるが、風變りにも、彼女の父が愛して、屢々その家に招いた事のある、黒人種のムーア人を、彼女の愛人として選んだのである。

それにデズディモウナは、彼の愛人として選んだ人間が不似合であると云つて、全然批難さるべきではない。黒人であるといふ事を除いては、この勇敢なムーア人は、どんな立派な婦人の愛情をもうけ得る資格を少しも缺いでは居なかつた。彼は軍人で、しかも勇ましい軍人であつた。そしてトルコ軍との大激戦の際の指揮によつて、ヴェニス軍隊の大將の位に昇り、國家からも重ぜられ、信頼されて居た。

オセロウはもと旅人であり、デズディモウナは（婦人はいつもさうであるが）彼がずつと以前を想

ウロセオ

ひ出しては語る、その身上話をきく事が大變好きであつた。彼が實際に見た戦、包圍、接戦、陸や海で彼が出會つた危険、城壁の破れ目に入つた時又は大砲の口に向つて進軍した時危機一髪といふところで逃れた事、如何にして彼が高慢無禮な敵のために捕へられ、賣られて奴隷の身の上となつたかと云ふこと、その國で如何なる振舞をし、また如何にして遁走したかといふ事、すべてかうした話を、彼が外國で見た不思議な事物、即ち廣漠たる荒野や、物語にでもありさうな洞窟、石切場、頂は雲に没して居る岩や山などの話や、野蠻な人民、即ち人を食ふ食人種の事や、肩の下から頭が生じて居るアフリカの種族などの物語につけ加へて話したのであつた。かうした旅人の話は、大層デズディモウナの心をひきつけたので、もし彼女がいつ家の用向で呼ばれて行つても、その用事を大急ぎで片付けて歸つて来て、むさぼるやうにオセロウの話をきいたものだ。一度彼は都合のよい時を利用して、彼女が願をするやうにしむけた。その願といふのは、彼女は是迄に随分澤山きいては居るけれど、それは部分的にすぎなかつたところの、彼の身の上話をすつかりして貰ひたいといふのである。彼はそれを承諾して、自分が若い時になめた艱難の話をし、彼女に幾度も涙を流させた。

彼の話が終ると、彼女は彼の勞に酬ゆるに多くの歎息を以てした。彼女は、それはこの上もなく不思議な、そして哀れな、ほんとうに哀れな話だといふ事を女らしい言葉で誓つた。彼女は、その話をきかなければよかつた、でも天が彼女をさうした男に生れさせて下さつたらよかつたと思ふと云つた。



それから彼女は彼に感謝し、また彼に告げて、もし彼に、彼女を愛して居るような友人があるならば、彼は彼の友人に如何に身の上話をすべきかを教へさへすればよい。すればそれが彼女の愛を得る事になるだらうといつた。一種人を魅するやうな美しさを見せ、顔を赧らめながら、たしなみを失はない程度に淡白にかけられた此の謎をきいて、それがオセロウに解けない筈はなかつたので、彼はもつと大膽にその愛をうちあげ、この千載一遇の機会に、この寛大な婦人デスディモウナの、秘かに彼と結婚しようといふ承諾を得た。

オセロウの皮膚の色から云つても、又その財産からいつても、ブラバンシオが彼を女婿とする事を承諾するだらうとは望めない事であつた。彼は娘を自由に置いて置いたが、しかし彼女は、ヴェニス<sup>の</sup>貴婦人の風習に従つて、やがて、元老院議員か又はその見込のある人を夫に選ぶであらうとのみ期待して居たが、その點では彼は欺かれた。デスディモウナは、黒人ではあるけれどもそのムーア人を愛し彼女の心と富を彼の勇敢な技倆と氣質とに捧げたのである。彼女の心は、その夫として選んだ男に全くさげられて居たので、此の聰明な婦人以外のすべての人にとつては、どうしても我慢の出来ぬものであるその皮膚の色さへも、彼女には結婚を求めた若いヴェニスの貴族達の白い皮膚や、奇麗な顔立よりも、もつと／＼價值あるものに思へた。

彼等の結婚は、ひそかに行はれたものではあるけれど、永く秘密の儘で居る筈がなく、老人ブラバン

シオの耳に入り、彼はムーア人オセロウの告訴者として、元老院會議へ現れた。(彼の主張によれば) オセロウは彼女の父の承諾も得ず、又歡待を受けた恩義に背いて、呪術や魔法を用いてデスディモウナを口説き落して結婚したのだといふのである。丁度此際ヴェニスの國家が直ちにオセロウの奉公を必要とする事件が起つた。即ちトルコが偉大なる準備のもとに艦隊を儀装し、かつてはトルコの所有地であつたサイブラス島を、ヴェニスから取りかへさうと云ふ目的で、その要塞地の方へと航路をとりつゝあるといふ報知に接したのである。この危急存亡の場合に際して、國家はその眼をオセロウに向けられた。彼のみがトルコ軍に對してサイブラス島を守る軍隊を指揮し得ると思はれたのである。そこでオセロウはいま元老院に召喚され、國家の大なる任務を帯ぶべき候補者として、同時に又ヴェニスの法律によつて死刑に處せらるべき罪を犯したものととして訴へられた罪人として、元老院議員の前に立つたのである。

老ブラバンシオの年齢と元老院議員としての資格とからして、列席の議員はその陳述を謹聴しなればならなかつた。しかし激昂して居る父は、證據はあげないで、想像し、または推量した事を述べ立て、大層偏狹な告訴をしたので、オセロウは、申し開きをするように命ぜられた時、自分の戀のないゆきを率直に語りさへすればよかつた。即ち彼はその求婚の始末を前に記したやうに、飾り氣のない雄辯をもつて語つたのである。彼は堂々、率直に物語つたので(それが眞實である證據なのだ)主



席判官の位置に居た侯爵は、かやうに物語つたならば、自分の娘でもかち得たであらうと告白せざるを得なかつた。オセロウが愛を求めた時に用ゐた呪術魔法は、戀する人間の正直な方法以外のものではなかつた妻が明かとなり、また彼が用ゐた只一つの魔術は、婦人の耳を喜ばせるやうな、情のこもつた話をする技倆であつた。

オセロウの此の辯明は、デズディモウナその人の證言によつて裏書された。彼女は法廷にあらはれて、生と教育との恩ある父に對する義務を述べ、更に彼女の主人であり夫である人に對する一層大きな義務、丁度彼女の母が母の父を去つて、彼女の父を選んだ時に示したのと同じ義務のある事を述べて父の許可を求めた。

この老元老院議員は、自分の告訴を支持する事が出来ず、種々遺憾の意を表明して、ムーア人を彼の許に呼び、仕方のない事として、娘を彼に與へたが、若し彼女を自由に抑へて置く事が出来れば彼に近づけないやうにするのであるがと云つた。又それに附け加へて、彼は他に子供がないのを心から喜ぶ。何故なれば、もし他に子供があれば、デズディモウナの此の振舞は、彼を教へて暴君となし、彼女の例に倣はないやうに、その子供等を鎖につなぐやうになるであらうからと云つた。

この困難にうちかつと、オセロウは、習慣によつて、軍隊生活の艱難は、他の人々にとつて食物や休息が自然なものであると同様に、彼にとつては自然なものであつたが、直ちにサイプラス島に於け

る戦の指揮をする事を引受けた。それにデズディモウナも、新婚の人々が通例その時を浪費するあの他愛もない楽しみに耽るよりもむしろ、(危険の伴ふ事ではあるけれど)夫の名譽を重んじて快く彼の出征を承諾した。

オセロウと夫人とがサイプラス島に到着したのと殆んど同時に、激烈な暴風雨がトルコの艦隊を四散せしめたため、島は目下のところ敵の襲撃を受ける虞はないと云ふ報告が到着した。然しオセロウが苦まねばならぬ戦がその時始まりかけて居たのである。悪意が彼の純潔な夫人を害しようとして煽動した敵は、その性質に於て、他國人や異端のトルコ軍よりもつと悪いものであつた。

將軍のあらゆる部下のうちで、キャシオほどに厚く彼の信任を得て居るものはなかつた。マイクル・キャシオはフロレンスの者で、陽氣で、多情で、氣持のよいものごしで、婦人に好かれる質の若い軍人であつた。彼は好男子で雄辯で、全く、若い美しい妻をもつた年のすんだ男(オセロウもある點までさうであつたが)の嫉妬を買ひさうな男であつた。けれどもオセロウは、彼が高潔であると同様に嫉妬心などももつて居なかつた。また卑劣な行爲が出来ないと同様、人を疑ふやうな事も出来なかつた。彼はデズディモウナとの戀愛事件に此のキャシオを雇ひ、キャシオは彼の求婚の仲人のやうなものであつた。と云ふのは、オセロウは、自分自身には婦人達を喜ばせるやうな情味のある會話が出来る技倆はないと思ひ、その素質をこの部下が持つて居るのを認めたので、屢々(彼自ら云つて居るやう



に)自分の代理者として彼に求愛に行つて貰つたのであつた。かやうな罪のない率直さは、この勇敢なムーア人の性格上の缺點といふよりもむしろ名譽となる事であつた。それであるからオセロウに次いで、(貞淑な夫人の事であるから、オセロウに對するとは、はるかに隔りがあつたけれど)温良なデズディモウナがキャシオを愛し信用したのに何も不思議はなかつたし、また二人が結婚した後も、キャシオに對する振舞は少しも昔と變るところはなかつた。それでキャシオも屢々彼の家庭を訪れた。そして、オセロウ自らはもつと嚴正な性質であつたけれど、彼の隔意のないおしやべりは不愉快な部類のものではなかつた。といふのは、オセロウのやうな氣質の人は屢々、われとわが身をあまり窮屈に感ずるので、それを通れるために自らの氣質と反對な人と交るのを喜ぶものであるから。でデズディモウナとキャシオとは、キャシオがオセロウのために求婚に行つた頃と同じやうに、共に語つたり笑つたりした。

オセロウは最近に、彼を信任のある地位であり、かつ將軍の身邊に最も近く侍する副官に昇進せしめた。この昇進が古參の將校たるイヤゴウに大なる悪感を與へた。イヤゴウはキャシオよりも自分の方にもつとその位置にのぼる権能があると思ひ、夫人達を相手とする事のみ適する男で、小娘同様、軍隊を戦闘に配置する事などは知らない人間であるとキャシオを嘲弄して居た。「彼はキャシオを憎みまたオセロウをも憎んだが、それはオセロウがキャシオを愛するのと、彼の妻のエミイリヤをあまり愛し

過るといつて、オセロウに對して、故のない猜疑の念を抱いたためであつた。かうしたつまらぬ憤怒がもとよなつて、イヤゴウの悪心は、恐ろしい復讐の陰謀を思ひめぐらすやうになつた。それはキャシオもムーア人オセロウも、またデズディモウナも一樣に破滅に陥しいれようといふのである。

イヤゴウは腹黒い男であり、且つ人間の性情に深く通じて、人間の心を苦しめるあらゆる苛責の中で(それは肉體の責苦よりも遙かに以上なものであるが)嫉妬の苦しみが最も堪えられぬものであり最も痛い刺をもつて居るものだといふ事を知つて居た。もし彼がオセロウをして、キャシオを嫉妬せしむる事に成功するならば、それは最も巧妙な復讐の仕方であり、遂にはオセロウ、キャシオ兩人中いづれかと、或は兩人とも生命を落す事となるかも知れぬと思つた。そして彼等が生命を失ふやうになつても、彼はかまはないのである。

將軍夫妻がサイブラス島に上陸すると、敵の艦隊が退散したといふ報知が來たので、島では祭日のやうな催しがあつた。誰もみな宴會をひらき飲めや歌への騒ぎをした。酒は溢るに計りにあり、杯はムーア人オセロウとその美しい夫人デズディモウナの健康を祝するために廻はつて行つた。

キャシオは其夜、喧嘩などが起つて島の住民を驚かし、新上陸軍に對して悪感を起させないやうに、兵士等の飲過ぎを防止せよとのオセロウの命を受けて衛兵の指揮をして居た。其夜イヤゴウは深くたくらんだ悪計を始めた。將軍に對する忠義と愛との假面をかぶつて、キャシオに大いに飲む(それは衛



兵の指揮にある將校には大禁物であるが、やうにすゝめた。キャシオはこの誘惑に暫らく抵抗して居たが、イヤゴウが巧に装ふ寛いだ態度に對しては、長くはもちこたえざる事が出来ず、彼は盃を重ねて飲み續けた。(イヤゴウが後から後からと酒を注ぎ、歌を歌つてすゝめたたので。)そしてキャシオの舌は滑かになりデズディモウナ夫人の賞讃をくりかへした。彼は幾度も夫人のために乾杯し、夫人は絶世の美人であると斷言した。そうするうち遂に、彼が口から入れた敵は彼の分別を盗み去り、イヤゴウが喉しかけた人間の言つた言葉に癩癩を起して劍を抜き、此の争鬪を鎮めようとして仲に入つたモニターノウと云ふ立派な將校が、此の格鬪の際に負傷した。騒動はいまや大きくなり始め、事のもとをつくつた當のイヤゴウは、一寸した酒の上の争ではなく、何か危険な暴動でも起つたかのやうに城の警鐘を鳴らさせて、眞先になつて非常を告げたのである。鳴りひびく警鐘はオセロウの眼を醒させた。彼は大急ぎで仕度を整へ、その場所へとやつて来て、キャシオに事の起りをたづねた。この時キャシオはわれにかへつて居り、酒の酔も少し去つて居たが、あまりの恥かしさに返答する事が出来なかつた。そこでイヤゴウは、キャシオを非難するのは不本意であるけれど、事の真相を是非知らねばならぬといふオセロウに強ひられ、やむなく言ふやうにみせかけて、事の顛末を(あまり酔つばらつて居て、キャシオが記憶して居なかつたのをよい事にし、自分の分前だけは柵にあげて)キャシオの罪を軽く言ふやうに思はせ乍ら、實際は事實より大きく見せるやうな方法で物語つた。その結果としてオセロウは、規律は嚴重に守る人であつたので、よぎなくキャシオの副官としての職を免じなければならなかつた。

かやうにしてイヤゴウの第一の謀略は完全に成功した。即ち今や彼はその仇敵を陥れ、その地位を失はしめたのである。然しこの不幸な夜の出来事をこの上利用するのはこの後の事である。この不幸のためにすっかり酔の醒めたキャシオは、うはべは友人らしく見えるイヤゴウに向つて、自分が、われと我身を黙に落すやうな愚物であつたとはと嘆いた。彼は仕方がなかつた。といふのは、どうして再び自分の地位を興へて貰ふやうに將軍に乞ふ事が出来よう。將軍は彼を酔漢だと云ふであらう。彼は彼自らに愛想が盡きた。イヤゴウはその事件を極く些細な事だと見なして居るやうなふりをして、イヤゴウ自身でも、又如何なる人間でも折にふれては酔つばらふ事があるかも知れぬ、で目下のしなればならぬ事は、今の境遇を出来るだけよくする事だ、將軍の夫人が今は將軍で、オセロウを如何やうにでもする事が出来る、だからデズディモウナ夫人に頼んで、彼のために彼女の夫に執成をして貰ふのが最上策であり、又彼女は、正直な人の頼みをいやとは云ひ得ぬ質であるから、此の種類の世話はすぐ引受けて、再び彼を將軍の氣に入るやうして呉れ、それから此の破綻のために二人の親密さは以前にまさるやうになるであらうと云つた。もしそれが邪惡な目的の爲めにしたものでなければ、イヤゴウの親切な忠告といふものであるが、それは後に分るやうにならう。



キャシオはイヤゴウが彼に忠告した通りにして、デズディモウナ夫人に歎願したが、夫人は正しい願であれば容易にきいて呉れる人であつたので、彼の爲めに夫に對する辯護者となり、命にかけても彼のために盡力しようとして約束した。彼女は早速、非常に熱心に又巧妙なしかたで、此の事にとりかゝつたので、オセロウは、キャシオに對して大層怒つて居たが、彼女をうまく外す事が出来なかつた。オセロウが延期を主張し、かゝる犯罪者を赦すにはあまり早すぎると辯じた時、夫人もまけては居ないで、それは明夜か、でなければその次の朝か、をそくもその次の朝かにして貰ひたいと云つた。それから彼女は、可哀相にキャシオが、如何に後悔し、如何に恥ぢ入つて居るかといふ事及び、彼の犯罪はそんなきつい遺責には價しないと云ふ事を例をあげて云つた。そしてオセロウが猶も躊躇して居ると、

「何とした事でございませう、あなた！」と彼女は云つた。「あなたに代つて求婚に来、時として私があなたを批難しますと、あなたの肩をもつたキャシオ、マイクル・キャシオの辯護をするとして、こんなにまで申しあげねばなりませんとは！私はこれはほんの一寸した御願だと思つて居ます。私が本當にあなたの愛を試すつもりの方は、もつと重大なる事件を御願ひ申します。」かやうな辯護者にかゝつてはオセロウは如何なる事もいやとは云へなかつた。で、時の問題は自分に任して呉れとデズディモウナに乞うたのみで、マイクル・キャシオを再び信任する事を約束した。

オセロウとイヤゴウとがたま／＼、デズディモウナのとりなしを懇願するために來て居たキャシオ

が、反對側の入口から今しも出て行かうとして居る時、彼女の居る部屋に入つた事があつた。すると謀計に抜目のないイヤゴウは、一人言を云ふかのやうに、わざと聲をひそめて、

「あれが嫌な事だて。」と云つたが、オセロウは彼の云つた事に大した注意は拂はなかつた。又實際すぐその後で夫人との間に交された談話は、それを彼の腦裏からとり去つてしまつた。しかし彼はあとになつてそれを思ひ出した。といふのはデズディモウナが出て行つた時、イヤゴウはたゞ自分の一寸した心あたりを満足させるにすぎないといつたやうに、オセロウが夫人に求婚して居た時、マイクル・キャシオがその戀を知つて居たかどうかとオセロウに尋ねた。それに對して將軍はさうだと答へ、更に求婚して居る間中彼は屢々仲に立つたのだと附加へて云ふと、それである不思議に思つて居た事件が分つて來たといふやうな風に、眉をしかめて、

「なるほど！」と叫んだ。それがオセロウの心に、部屋に入つて來て、デズディモウナと一緒に居るキャシオを見た時に、イヤゴウの放つた言葉を想ひ起させ、そして彼は此の事には何か譯があると考へ始めた。と云ふのは、彼はイヤゴウは正しい人間であり、愛と正直とに満ちて居ると思つた。そして普通の悪漢がやれば詭計と見える事も、彼の場合には、あまり重大で口で云へぬやうな何事かを持つて居る正直な心の自然な働のやうに見えたからである。そこでオセロウは、イヤゴウに、彼の知つて居る事、彼が最も悪い事だと考へて居る事を口に出して云つて呉れと願つた。「イヤゴウは云つた。



「王宮にさへも悪事は入り込むのでありますから、もしも私の心の中に卑しむべき邪推でも入り込んで居たら何と致しませう。」それからイヤゴウは言葉を續けて、もし自分の不完全な観察がもとゝなつて、何か面倒な事がオセロウに起つたら遺憾千萬であり、かつ自分の思つて居る事を知るのは、オセロウの平和のためによろしくないし、また人の名聲は取るに足らぬ疑のために、取り去らるべきものではないからなぞと云つた。さうしてオセロウの好奇心が、かうして謎やとびくの言葉をきいて募りに募つた頃、イヤゴウは、オセロウの心の平和を心から案じて居るかのやうに、嫉妬の念に驅られるなど懇願した。かやうな謀計をもつて、この悪漢は、猜疑を起すなど忠告するふりをするその忠告で、かゝる事には備のないオセロウの胸に疑念を起させたのである。

「私は、妻が美しくて、交際や饗宴が好きで、心置きなく話し、歌を歌ふ事も、音楽を奏する事も舞踏も上手である事は知つて居る。然し徳があれば、かうした諸藝も有徳なものである。私は妻が不徳であると思ふ前に、先づ證據を見なければならぬ。」とオセロウが云つた。それでイヤゴウはオセロウが軽々しく夫人を疑はないのを喜ぶかのやうに、自分は證據はもつて居ないと淡白に斷言したが、しかしキャッシュオが傍に居る時に、彼女の舉動によく注意するやうにと乞ふた。それには嫉妬を起してもいけないし、またあまり安心しすぎてもいけない。安心しすぎていけないと云ふ譯は、彼は國を同じうする伊太利の婦人の氣質は、オセロウが知つて居る以上によく知つて居る、又ヴェニスに於ては、

妻女達は夫には見せられないやうな、信用出來ぬ行を秘密裏にするものであるからと云つた。それから彼は巧に、デズディモウナがオセロウと結婚する時にその父を欺き、極く内密に事を運んだので、可哀想に老人は魔法が用ゐられたと思つたと云ふ事をそれとなく仄かしたのであつた。オセロウは此の論にひどく動かされ、身にしみてさうだと思つた。といふのは、彼女が父を欺いたとすれば、どうしてその夫を欺かないと云ふ事が云へよう。

イヤゴウは將軍の心を騒がせた事に對して宥恕を乞ふたが、然しオセロウは、イヤゴウの言葉をきいて、實は内心の悲しみのために、ひどく心を動して居たけれど、わざと平氣を装うて、イヤゴウにその次を物語るように乞ひ、イヤゴウは、キャッシュオ、彼をイヤゴウは友人と云つて居るのであるが、そのキャッシュオのためにならぬ事と云ふのを好まないと云つたやうに、幾度も言譯をし乍ら言葉を續け、それから彼は急處をついて、如何にしてデズディモウナが國と顔色とを同じうする人々の、多くの似合はしい求婚をしりぞけ、ムーア人である彼と結婚したかを彼に思ひ出さしめ、さうした行は、彼女の性質にふさはしくない事であり、且つ彼女が向ふ見すの意志をもつて居る事を證明するものである。で、彼女が、前後をよく考へて見るようになった時、彼女が、オセロウと彼女の同國人、即ち若いイタリー人の立派な姿と、はつきりとした色の白い顔立とを比較するようになるのは當然だと云つた。それから彼は終に臨んで、オセロウに向ひ、キャッシュオとの和解は今暫らく延期し、その間に、どんな熱



心さをもつてデズディモウナがキャシオのために執成すかを注意するがよい、その執成をする際に多くの事が分るものであるからと忠告した。かように悪辣に此の腹黒い悪漢は、純潔な婦人の優しい特質を利用して、彼女を破滅に導き、又彼女の深切心を材料として彼女を陥れる網を造らうといふ奸策をめぐらした。即ち、先づキャシオにすゝめて、彼女の執成を懇願するようにし、それから外ならぬその仲裁がもとなつて彼女の身の破滅となるような企みをしたのである。

此の對談が終る時、イヤゴウはもつと確かな證據があがる迄は、夫人は潔白であると思ふようオセロウに乞ふた。そしてオセロウも我慢をすると約束したが、しかしその瞬間から悪だくみにかゝつたオセロウは、決して心の平和を味ふ事はなかつた。罌粟も曼陀羅華の液も、また世界中の如何なる眠り薬も、再び彼にほんの昨日まで樂しむ事の出來た心地よい眠を回復して呉れる事は出來なかつた。彼は自らの職業が厭になつた。彼等はもはや軍事に興味がなくなつた。かつては、軍勢や、軍旗や、戦列やを一目見ると奮起し、また軍鼓や、喇叭や又は軍馬の嘶をきけば躍つた心も、軍人の美德である誇も希望もすつかり失つてしまつたやうに見えた。さうして彼の軍人としての熱誠も、又昔の喜びもすべて彼を見捨ててしまつた。或時は、彼は妻は正直であると思ひ、又ある時は、さうではないと思つた。それからまた、彼はその事をきかなければよかつたと思つた。その事を知りさへしなれば彼女がキャシオを愛したからとて、それだけ自分の不幸となるわけではなかつた。かうした狂はしい

思にかき亂されて、或時はイヤゴウの喉許をひつ捉へ、デズディモウナの不義の證據を出せとせまり、出さねば彼女を誣ひたのだから直ちに殺してやると威嚇した。イヤゴウは、自分の正直を惡徳と間違へられたので憤慨するように装ひ、オセロウに向つて、デズディモウナが薔の模様が刺繍してある手巾を手にして居るのを見た事はないかとたづねた。オセロウは、さうした手巾を妻に與へた事があり、またそれは彼の最初の贈物であつた旨を答へた。

「その同じ手巾で」とイヤゴウは云つた。「今日マイクル・キャシオが顔をふいて居るのを私は見ました。」

「もしお前が云ふ通りであるならば、」とオセロウは云つた。「私は二人に對して立派に復讐しないではやまない。それでまづ、お前の忠義のしるしに、三日以内にキャシオを殺せ。そしてあの美しい惡魔（彼の夫人の事を意味するのである）に對しては、私は退いて何か早速に殺す手段を考へよう。」

空氣のやうに軽い些細な事柄も、嫉妬を抱いて居るものゝ眼から見れば、聖書の言葉のやうに強い證據となるものである。キャシオの手にあるのを見られた彼の妻の手巾は、欺かされて居るオセロウにとつては、どうしてキャシオがそれを手に入れたかを一度もたづねることなしに、二人に死の宣告する十分な動機となつたのである。デズディモウナはキャシオに左様な贈物をした事は決してなかつたし、また貞節な婦人であるから、夫の贈物を他の男に與へるやうな不義をして夫の體面を汚すやうな



事はしなかつた。キャシオもデズディモウナも、二人共オセロウに對して何の罪も犯して居なかつたのである。しかし、心には休むひまもなく陰謀をたくらんで居る悪漢イヤゴウが、彼の妻（善良ではあるが道義的意志の弱い女）に、模様を寫すといふ口實ではあつたが、實際はキャシオが発見しさうな場所にそれを落し、それはデズディモウナの贈物であるとのめかす手掛りをつくるために、この手巾をデズディモウナから盗ませたのであつた。

オセロウはその後間もなく妻に會ひ、頭痛がするふりをして（本當に頭痛がして居たかも知れないが）、顚顚ををさへるから彼女の手巾を貸して呉れと云つた。彼女は云はれる通りにした。

「これではない、」とオセロウが云つた。「私が御身に與へた手巾だ。」デズディモウナはそれを所持して居なかつた。（と云ふのは、前に述べたように、それは盗まれて居たからである。）

「どうしたと云ふのだ。」とオセロウは云つた。「これは本當にけしからぬ事だ。あの手巾はある婦人が私の母に與へたものだ。その婦人は魔法使で、人の心を讀む事が出来た。彼女は私の母に、母がそれをもつて居る間は、母には愛嬌があつて、私の父は母を愛するであらう。が、もし母がそれを失ふか又はそれを人に與へてしまふならば、父の愛は去り、今迄愛して居ただけ、それだけ母を嫌悪するやうになると云つた。母は臨終の時それを私に與へて、もし私が結婚することがあれば、それを私の妻となる人に與へよと命じた。私はさうした。其を大切になさい。御前の眼同様に大切になさい。」

「さうで御座ますか。」と夫人はびつくりして云つた。

「それは本當の事だ。」とオセロウが続けて云つた。「あれは魔法の手巾である。二百年間も此世に住んで居た巫女が、烈しい豫言の力を感じて造つたものである。その絹を供給した蠶は淨められ、また絹は乙女の心臓から絞り取つた血で造つた液で染めたのである。」デズディモウナは、その手巾の不可思議な力の事をきいて死ぬ計りに驚いた。と云ふのは、彼女は明かにそれを紛失した事を發見し、それと共に彼女の夫の愛情を失ひはしないかと心配した。それからオセロウは飛び立つて、何か向ふ見ずの事をしさうな様子をし、そして尙ほも、彼女が出し得ない手巾を要求するので、彼女は夫のあまりむきになつて居る考を轉じようとして、彼の手巾に就ての物語はすべて、マイクル・ギヤシオに關する彼女の切願を云ひまぎらさうとするに過ぎないといふ事が分つたと快活に云ひ、イヤゴウが豫言した如く、キャシオの事を褒め續けたので、オセロウは遂に、全く狂亂の有様で部屋を飛び出した。

それで、デズディモウナは、夫は嫉妬を起して居ると、不本意ながらも疑ひ始めたのである。

彼女は彼を怒らせるような、どんな動機を與へたか分らなかつた。それから又、彼女は高潔なオセロウを疑つた我身をせめ、これはきつとヴェニスからの何か心配な報知か、又は國事の紛糾かのため心が攪亂されて、以前のやうに機嫌がよくないのだと思つた。そして彼女は云つた。

「男とても神様ではない。で男が結婚の日に私共に示した深切を、結婚した後迄も期待してはなら



ない。』で彼女は夫の不深切をあのやうに不深切に判断した我身を呪つた。

再びオセロウとデズディモウナは會つた。彼は更に明らかにさまに、不貞であり、その名前はあげなかつたが、他の男を愛して居るといつて彼女を責めた。そしてオセロウは泣いた。でデズディモウナは云つた。

『あゝ！悲しい日だ！なぜあなたはお泣きになるのです。』オセロウは彼女に向つて、自分はあらゆる凶事——貧窮にでも、病氣にでも、また侮辱にでも、勇氣をもつて耐えて來たのであるが、彼女の不貞には心も破れたと云つた。それから彼は彼女を、外觀があまりに美しく、香が非常によいので、それに對する官感が痛む雜草だと呼び、彼女は生れて來なければよかつたのだと云つた。そして彼女が彼女の許を去つた時、この純潔な婦人は夫の彼女に對する不當な疑のために、氣が遠くなる程驚いたので、重い眠が彼女を襲うて來た。それで侍女に、床をのべその上に婚禮の時の敷物を敷くやうに命じ、そして、人々がその子供を教へる時には、優しい手段と容易な課業によつて教へるのであるが、オセロウもそのやうにして彼女を叱つて呉れてもよかりさうなものだ、といふのは、本當に彼女は叱られる時は子供に過ぎないのだと云つた。これがこの優しい婦人の云つた怨言のすべてであつた。

デズディモウナは、夫も後から來る事だと思つて臥床についたが、思ひ煩つた結果間もなく眠に落ちた。その時オセロウは、謀んで居た、妻を殺さうといふ邪惡な目的を抱いてその部屋に入つた。然し彼

女が眠つて居るのを見た時に、彼は血を流すやうな事もしなければ又石膏よりも尙ほ白い彼女の肌を傷けもすまいと思つた。たゞ彼女を生かしては置くまいと決心した。生かして置いては（と彼が云つたのであるが）彼女は彼を欺いたやうに更に多くの人々を欺くであらう。それから彼は彼女に（彼の言葉で云へば）最後のキスをしたのであるが、そのキスは如何にも快いものであつたので、彼は再びキスしないでは居られなかつた。そして彼は泣いた。けれどもそれは殘酷な涙であると彼は云つた。

デズディモウナは彼のキスで目を醒した。そしてオセロウを見あげた。それから彼が下唇を噛みしめ、眼を光らせて居るのを見た。彼女は彼がさうした様子をする時は、危険であるといふことを知つて居た。それから彼は彼女に死の覺悟をし、また彼女の魂まで殺しはしないから祈禱をせよと命じたのでこの罪のない妻は、その生命は彼の手中にあるので、憐みを乞ひ、自分の罪を知りたいと云つたので、彼はキャシオの名を擧げ、（彼の言葉をかりて云へば）彼女が彼に與へた手巾の事を云つた。そしてこの罪のない夫人が身のあかりをたてようとした時、彼は突然に云ひ譯はきかないと云つて、寢衣をかぶせて彼女を覆ひ、遂に彼女を窒息せしめた。

丁度その瞬間に、負傷して血を流して居るキャシオが此家に運ばれた。イヤゴウがその部下の一人を使喚して、彼を暗殺せしめようとしたのである。だが此の男はキャシオを殺さうといふ企に失敗し、（負傷させたけれど、致命傷ではなかつた）、イヤゴウは事の發覺をふせぐためにその男を殺したが、



彼のポケットの中に數通の手紙が発見され、その手紙によつて、イヤゴウの罪とキヤシオの無實が疑なき迄に明瞭となつた。そしてキヤシオは今、オセロウの寛恕を乞ひ、自分が如何なる點で彼の氣に入らぬ事をしたので、自分を暗殺するためにイヤゴウを使つたのであるかを尋ねるために來たのである。

この發見は、オセロウにとつては晴天の霹靂であつた。彼は今、自分は大いの人殺にすぎず、彼の妻（可哀相な純潔な夫人）は彼に對して常に貞節であつたと云ふ事を明かに知つた。此の發見に伴うて起つた極度の苦痛が、生命を支へる事が出來ないようにしたので、彼はわれとわが刃の上に伏し、わが手で殺したなつかし妻の屍の上に身を投げて息絶えた。

かうした早まつた行は、傍に居た人々に甚だしい恐怖と驚愕の感とを起させた。と云ふのはオセロウは立派な名聲をもつて居り、惡漢の奸計、それを自ら立派な性質をもつて居るために退いて疑ふ事も出來なかつたが、その奸計に乗ぜられる迄は、彼は愛情の深い、妻には目のない夫であつた。彼は愛に溺れて眼が見えなかつたのである。そして彼の男らしい眼からは（彼が自らの誤を知つた時）アラビヤの樹からゴム汁が滴るやうに急に涙が流れたのであつた。そして彼が死んだ時、彼の生前の勳功と勇敢な行爲とは人々の思出となつた。かうなると彼の後繼者のため残されて居る事としては、たゞイヤゴウを嚴しい刑に處する事と、實際彼は重い刑罰で處分されたが、それと、名聲の高い將軍の悲しむべき死をヴェニスの國家に報知する事とであつた。

## ペリクリイズ



タイアの君主ペリクリスは、奸悪なる希臘の皇帝アンタイアカスが密になした或る怖るべき行爲を發見したが、その爲めに皇帝に恨まれ、タイアの町とペリクリスの臣下に恐ろしい災難を加へると脅嚇されたので、それを避ける爲めに、自ら先んじて己が領地を逃れ、放浪の旅に上つた。多くの場合権力ある人の内密の犯罪をあばくといふ事は危険な事である。ペリクリスは國內の政治を、正直で才幹ある大臣、ヘリカナスの手に委ね、權勢あるアンタイアカスの怒が和ぐまで、暫く其の身を隠さうと思つてタイアから船出をした。

王が最初に航路を向けた場所はサアサスであつた。當時サアサスの町は非常な飢饉に苦しんでゐるといふ事を聞き、王は其を救済する爲めに食糧を積み込んで行つた。着いて見ると町は極度の窮乏に陥つてゐた。王は恰も、思ひもつけぬ救助に來た天の使のやうに思はれたので、サアサスの大守であるクレオンは非常な感謝を以て彼を迎へた。しかしペリクリスは此處に長くは留らなかつた。彼の忠實な大臣から手紙が來て、アンタイアカス皇帝は既に王の住所を知り、密かに使ひを送つて彼の生命をうかがつてゐるので、サアサスに止るのは安全でないと警告して來たからであつた。此の手紙を受け取ると、王は早速、彼の惠によつて生き返つた全人民の祈と祝福の中に、再び船出をした。

船はまださ程遠く行かぬうちに、怖ろしい嵐に逢つた。船に乗つてゐる者は悉く死んでしまつたがペリクリスだけは助かり、波の爲めに裸體となつて或る見知らぬ濱邊に打ち上げられた。王は暫く其處を彷徨ふうちに、貧しい數人の漁夫に見附けられ、其の家に伴れて行かれて、食物や着物を與へられた。ペリクリスは、此の國はペンタポリズと云つて、王の名はサイモニデズ、其の平和な統治と善政の爲めに普通サイモニデズ善王と呼ばれてゐる事を知つた。漁師たちはまた彼に向つて、此のサイモニデズ王には美しい姫君があるが、明日は恰度此の姫の誕生日に當るので、宮中では盛大な馬上仕合が催されることになつて居て、あらゆる地方から王子や騎士が集り、美しき姫君サイサの愛を獲る爲めに、互に武術を競ふのであると話した。王は此の話を聞くと、自分の立派な甲冑を失くして、その勇敢な騎士の中に交ることの出來ぬのを密かに嘆いた。其の時一人の漁夫が這入つて來て、網で掬ひ上げたのだと云つて完全な一揃の甲冑を持つて來た。それは實に王が失くした甲冑であつた。王は自分の甲冑を見ると言つた。

『有難い、有難い。いろ／＼難儀な目に逢つたが、これでいくらか元に戻れるものを神様が與へて下さつた。この甲冑は亡き父譲りのもので、大切な記念故、何處へ行くにも我が身を離さず持つてゐるほど大切に來たものだ。それを奪ひ取つた荒海も今は穏やかになつたので、自分に戻して呉れたのだ、お禮を言ひますよ。父の記念の品が再び手に入つたからには難船も大した不幸ではない。』



翌日ペリクリイズは、勇ましい父の甲冑に身を装ひ、サイモニデズの宮殿へ赴いた。ペリクリイズは馬上仕合で拔群の技をふるひ、名譽あるサイサの愛を得んものと、武術を競ふたあらゆる勇敢な騎士や王子達を、易々と打ち負かして了つた。宮廷の馬上仕合で、王女の愛を得る爲めに勇敢な武士達が相競うて戦ひ、若し一人が凡ての者を打ち負かした時には、當の姫君は、其の姫君の爲め此の勇敢なる競技は捧げられたものであるから、其の勝利者に敬意を表するのが習慣になつてゐた。サイサも此の例に洩れず、彼女は直にペリクリイズが打ち負かした騎士や王子達を退けて、特別に恩恵と敬意を表し、當日の幸の王として勝利の花環を以て頭を飾つてやつた。ペリクリイズは美しいこの王女を一目見たときから忽ち激しい戀に陥つた。

サイモニデズ善王は、ペリクリイズの勇氣と立派な性格とを非常に嘉したので、實際彼は立派な紳士で、諸藝に卓越してゐたが、彼の素性はよく分らなかつたけれども、(ペリクリイズはアンタイアカスを怖れて、自分は單なるタイアの一紳士に過ぎぬと言つて置いた)王女の愛が深く彼に注がれてゐるのを見た時に、この見知らぬ勇者を娘の婿にするのに躊躇しなかつた。

ペリクリイズはサイサと結婚して未だ數ヶ月も経たぬうちに、彼の仇のアンタイアカスが死んだといふ報知を受けとつた。またタイアの人民達は王の長い不在に辛棒が出来なくなり、今にも叛逆してヘリカナスを王の空位に即けようとしてゐると云ふ事であつた。此の報知はヘリカナス自身から來たも

ので、彼は主君に對して忠義な臣下であつたから、己に捧げられた高位を受け入れようとせず、ペリクリイズに人民の意嚮を知らせ、再び國に歸つて元の正當なる權力を其の手に納められるやうにと願つた。サイモニデズは、其の聲が(無名の騎士と思つてゐた)タイアの有名な君主である事を知つて、非常に驚き且つ喜んだ。しかし王はまた直に尊敬する聲と愛する娘に別れなければならぬ事を知つて、一紳士であると許り思ひ込んでゐた彼がさうでなかつた事が却つて残念であつた。それに王女のサイサは恰度妊娠してゐたので、危険な海を航海させることを心配した。ペリクリイズも分娩がすむ迄父王の許に居たが良いと希望したが、氣の毒な妃はどうしても夫と共に往くと云ふので、タイアに着くまでは産褥に就くこともあるまいと考へ、とうとう其の願ひを容れる事にした。

不幸なペリクリイズは海にはよく縁がなかつた。タイアの町に着くつと前に、また怖ろしい嵐に逢つた。サイサはあまりの怖ろしさに病氣になつてしまつたが、暫くすると妃の乳母のライコウリダが、赤ん坊を抱いてペリクリイズの所へ來て、妃は此の赤ん坊を産むと直に死去されといふ悲しい報知を王に告げた。乳母は父王の方へ赤ん坊を差し出して言つた。

『こんな場所にお置き申すのは、あまり御小さいので可哀さうで御座います、亡くなられた御妃様の御子様でございます。』

妻に死なれたといふ事を聞いた時のペリクリイズの深い苦惱は、如何なる言葉にも盡せない程であつ



た。やつとものが言へるやうになると、王は言つた。

「あゝ神様、何うしてあなたは、立派な賜物をわれ／＼互に愛するやうに與へ給ひ、そして直ぐに奪つておしまいになるのです。」

「御辛抱遊ばせ、殿下。」とライユウリダは答へて、

「ここに亡くなられた御妃様の生きた形見である、小さな御姫様がいらつしやいます。此の御子様  
の爲めに、もつと勇氣を御出し遊ばせ。殿下、此の尊い御子様の爲めにだけでも御辛棒遊ばせ。」

ペリクリイズは生れた許りの赤ん坊を抱き上げ、其の小さな赤ん坊に向つて言つた。

「お前の生涯はどうか穏やかであつて呉れ。このやうに吹き荒ぶ嵐の中で生れた赤ん坊は他にあるまい。お前の身の上はどうか穏やかで静かであつて呉れ、王の子供と生れてこのやうな亂暴な歓迎を受けたものは他にあるまい。これから先きの事はみな幸福であつて呉れ。お前を胎内から迎へる爲めには、火と風と水と地と天とは出来る丈けの暴威を振つたので、お前は苦しい誕生をしたのだ。先づ最初に、御前の失くしたものは」と母親の死を指して、

「お前が新たに生れ出た此の世で見出すあらゆる喜びを以てしても、償ふことは出来ぬほど大きなものである。」

嵐はなほも激しく猛り狂つたので、それに水夫達は、死人が船中に在る間は嵐は決して止まぬとい

ふ迷信を抱いて居たので、彼等はペリクリイズの許にやつて来て、王妃の屍を海に投げ込むやうにと要求した。彼等は言つた。

「何といふ御勇氣でせう。神よどうか殿下を助け給へ。」

「勇氣はある」と悲しみに暮れてゐる王は言つた。

「予は少しも嵐を恐れぬ。嵐では此上もなく酷い目に逢つたんだから。然し此の可哀さうな赤ん坊、生れたての海の旅人をいとしう思ふので、嵐が止めばいゝと思ふ。」

「申し上げますが、殿下の御妃様は海の中に御棄てにならなければなりません。死人を船の外に捨てませぬ限りは、波は荒れ、風は吹き、嵐は止みませぬ。」

ペリクリイズは此の迷信が薄弱で、根據もない事を知つては居たが、辛棒強く其に服して言つた。

「お前達がそれを適當な處置と思ふなら、妃は海に投げ込まねばなぬ。憐れなる妃ではある！」

此の不幸なる王は愛する妻に最後の別れを告げに行つた。そしてサイサの顔を覗きこんで言つた。

「あゝお前は怖ろしい御産の床に就いた。燈火もなければ火もない。無情な天地は御前のことを全く忘れてしまつたのだ。お前を墓に清くして葬る時もない、碌に棺にも入れないで海に投げなければならぬ。お前の骨の上に立てる記念碑の代りに、騒がしい波は、名もない貝の間にあるお前の屍の上を壓倒するだらう。おゝライユウリダ、ネスタアにさう言つて、香料やインク、紙、予の箱や寶石



を持つて來させよ。そしてナイカンダアに縋子張りの棺を持つて來るやうに言つて呉れ。赤ん坊を枕の上に臥かせて置いて、直ぐこの事を言ひに行つて呉れ、ライコウリダ。其の間予はサイサに憎らしく別れを告げる』

彼等はペリクリイズの所へ大きな箱を持つて來た。其の中に、(縋子の屍衣に包んで)王妃を入れ、佳い匂ひのする香料を振りかけ、傍に高價な寶石と、王妃の身分を記し、また王妃を入れてある此の箱を見附けた者があれば、どうか葬式をして貰ひたいと書き記した紙片を入れて置いた。王は此の箱を自分の手で海の中に投げ入れた。嵐が止むと、ペリクリイズはサアサスに向けて行くやうに命じた。

『此の赤ん坊はタイアに着くまでは迎も持つまい。一旦サアサスに寄つて、氣を注げて育て貰はなければならぬ。』とペリクリイズは言つた。

サイサが海に投げこまれた其の嵐の夜も過ぎて、翌る朝早く、エフィサスの立派な紳士で、優れた醫者であるセリモンが海岸に立つてゐた時、召使共が、波の爲めに打ち上げられたと言つて大きな箱を持つて來た。

『この箱を濱邊へ打ち上げるやうな大波をこれ迄見た事がありません。』と召使の一人が言つた。セリモンは其の箱を家へ運ぶやうに命じた。彼は其の箱を開けて見て驚いた、中には美しい若い婦人の死體があつた。その他に佳い匂ひのする香料や、貴重な寶石の箱があるのを見て、セリモンはこれは

屹度身分のある人が、こんな不思議な埋葬をされたのであらうと推定した。なほよく探して見ると、紙片があつて、それに依つて彼の前に死んだやうになつて横はつてゐる婦人は、タイアの君主、ペリクリイズの妃であるといふ事を知つた。彼はこの不思議な出來事に驚嘆し、また美しい妃を失つた其の夫に非常に同情した。

『ペリクリイズ王、若し貴方が生きてゐられるなら、貴方の胸は悲しみで裂けるでせう。』と言つた。

彼は尙ほ仔細にサイサの顔を眺めたが、其の顔は生き／＼として少しも死んだやうには思はれないので、彼は言つた。

『早まつて貴方を海に投げこんだやうです。』

セリモンは、彼女を死んでゐるとは思はなかつた。直ぐに命じて火を熾させ、適當な興奮劇を持つて來させ、また万一蘇生つた場合の妃の驚きを沈める爲めに、靜かな音樂を奏する用意までさせた。セリモンは、妃を取り巻いて驚いて眺めてゐる一同に言つた。

『皆さん、何うか此の婦人に空氣を吸はせて下さい。妃は蘇生しますよ。失神してから未だ五時間以上は経たないでせう。御覽なさい、どうやら息を吹き返した。生き返つた。御覽なさい、目蓋が動いてゐる。この美しい婦人は蘇つてわれ／＼に、悲しい物語を話して、泣かせる事です。』

サイサは死んだのではなかつた。子供を産むと直ぐに全く氣絶してしまつたのであつた。それを見



て皆は彼女を死んだものと思つた。今この深切な紳士の看護で、彼女は再び生き返つて光明を見た。妃は眼を開けて、言つた。

「私は何處にゐるのでせう。夫は何處に居るのでせう。一體ここは何處でございませう。」  
セリモンは徐々に、出来事を話してきかせた。そしてもう物を見ても大丈夫と思はれるやうになつてから、彼女の夫の手で書かれた紙片と寶石とを見せてやつた。妃は其の紙片を見て言つた。

「これは夫の書いたもので御座います。船に乗つて出かけたのは良く存じて居ますが、何處で子供を産んだのか、それは少しも分りませぬ。しかし夫にもう逢ふ望みが御座いませんから、私は尼の衣を着けて、何の楽しみも致しませぬ。」

「お妃様、若し御言葉通りになされたいので御座いましたら、ダイアナの寺院もここからさう遠くは御座いません。其處で尼に御なれになります。また若し御宜しければ私の姪を御供に差し出します。」  
サイサは此の申し出を感謝して受けた。そして體も全く元通りになつてから、セリモンは彼女をダイアナの寺院に入れた。妃はそこで尼となり、失くなつたと思ふ夫の追善と、其の當時の最も敬虔なる勤行のうちに、月日を過した。

ペリクリイズは小さい王女を伴れて、(王女の名は、海で生れたのでマリナと附けた) サアサスに行きサアサスの町の太守クリオンと其の妻のダイアナに王女を托さうと考へた。王は此の前、サ

アサスが飢饉で困つてゐた時、救けてやつた事があるので、母親のない王女を悪くは取り扱ふまいと思つた。クリオンはペリクリイズ王を見て、また王の遭遇した不幸の話を聞いて、言つた。

「お、殿下の美しい御妃様、此處に御伴れになつて御姿を拜ませて頂くことが出来るやうに、天意に適ひましたら—」

「われ／＼は天の命に従はなければなりません。サイサが其の中に眠つてゐる海、其の海がしたやうに、假令私が怒り、號叫したところで、其の結果は同じ事です。私の優しい赤ん坊、マリナをあなたの御慈悲に托します。此の赤ん坊はあなたの御世話に委せます故、どうか王女らしく育ててやつて下さい。」

それからクリオンの妻ダイアナの方を向いて、言つた。

「奥方、どうか此の子を育てて頂く御世話を願ひたいものです。」

「殿下、私には子供が一人御座いますが、王女様を御大切に致すほど、大切には致しません。」と夫人は答へた。クリオンも亦同じやうな約束をして、言つた。

「ペリクリイズ王、殿下が、私の人民に穀物を御恵みになつて御盡し下された立派な御行爲は、(人民は毎日祈りを捧げる毎に、殿下の御名を唱へます) 王女様にお報ひ致さなければなりません。万一私が王女様を疎かにするやうな事がありましたなら、殿下に救はれた人民共は無理にも私に務め



を果させるでせう。しかし務めを果すに、刺戟を受けなければならぬ程になりましたら、神様は、私は愚か子孫の末々までも罰を御與へになりませう。』

ペリクリイズは、王女が注意深く育てられるといふ事を確めたので、クリオンと其の妻ダイアニジアの保護のもとに王女を残し、又王女と共に乳母のライコウリダをも残した。ペリクリイズが出發する時、マリナは自分の不幸を少しも知らなかつたけれども、ライコウリダは主人と別れるのを悲しんで泣いた。

『おゝ泣いて呉れるな、ライコウリダ』とペリクリイズは慰めて、

『泣いて呉れるな。お前の小さな主人を大切にしてお呉れ。これから先きはあれの恩寵に頼るやうにせよ。』と言つた。

ペリクリイズは無事にタイアに到着し、再び何事もなく王位に就いた。死んだと計り思つてゐる妃は嘆きに暮れて未だエフィサスに居た。不仕合せな母親が未だ一度も見なかったことのない王女のマリナはクリオンの手で高貴の生れにふさはしく育てられた。クリオンは王女の教育に非常な注意を拂つたので、マリナが十四歳になつた頃には、當時最も深い學問をした人でも、マリナの學問には及ばない位であつた。彼女は神のやうに歌ひ、女神のやうに踊り、針を持つては、鳥にしる、果實、花にしる、自然其のまゝの姿を寫し出すかと思はれるほど巧妙で、マリナが絹糸で刺繡した薔薇の花が生きて居

る自然の薔薇に似て居る事は、二つの實物が相似てゐるにもおさく劣らなかつた。しかしマリナが教育のお蔭で、誰にも感心されるほどの藝能を習得した時に、クリオンの妻であるダイアニジアは、自分の娘が遅鈍な爲めに、マリナが上達した程の完全さに達せぬといふ嫉妬心から、マリナを此の時より深く憎むやうになつた。マリナにはあらゆる賞讃が與へられるのに、同じ年齢で、マリナと同じ注意深い教育を受けて、同じほどに成巧しないわが娘が比較的無視されてゐるのを知つて、マリナさへ居なくなれば自分の不運な娘も少しは尊敬されるやうにならうといふ甲斐ない望みから、マリナの邪魔拂ひをしようといふ計畫を立てた。これを實行する爲めに、夫人は男を雇ひ入れて、マリナを殺させる事にした。そして此の悪計を果すに時機は宜しと思ふ頃、恰度、マリナの忠義な乳母であるライコウリダが死んだ。若いマリナが死んだライコウリダのことを思つて泣いてゐる時、ダイアニジアは、王女を殺せと命じて置いた男と相談をしてゐた。此の悪事をなす爲に雇はれた男はリオナインと言つて、非常に悪い人間であつたが、王女を殺す事は仲々容易に引き受けなかつた。マリナはそれ程、誰からでも愛されてゐたのである。彼は言つた。

『お嬢さんはいゝ人間だ！』

『それだからさ、神様が御召しになるのに餘計適してゐるのだ。』と無慈悲な敵は答へて、

『それ、王女は、乳母のライコウリダの事を思つて、泣ながらこゝへ遣つて来るよ。私の命令通り



にする決心はついたかね。」

リオナインは夫人に従はぬも恐ろしいしするので、

「決心はつきました。」と答へた。そこで此の簡単な言葉の中に、類ひ稀なるマリナの時ならぬ死が定められたのであつた。王女は手に花籠を持つて近づいて來た。深切なライコウリダの墓の上に毎日撒くといふ花が這入つてゐた。紫色の堇や金盞花が、夏の日の續く限りは、乳母の墓の上に定めし絨毯のやうに掛つたことであらう。

「あゝ、私は何て不仕合せなんだらう。嵐の最中に生れて、其の時母上様は御亡くなりになつた。此の世は私にとつては、まるで止むことのない嵐のやうなもので、私の友達から私を離してしまふ。」と王女は言つた。

「おや何うなさいました、マリナ様」とダイオニジアは素知らぬ顔して言つた。

「獨りで泣いていらしやるのですか。まあ何うして私の娘は御一緒に居ないのでせう。ライコウリダの事を御嘆きなさいますな。私が乳母になつて差し上げます。あなたの御美しさが無益な嘆きをなさるので、すつかり變つてしまいました。さあ、其の花を御借し下さいませ。潮風に當るとすつかり悪くなつてしまいますから。そしてリオナインと一緒に散歩をなさいませ。空は晴れて居ます。少しは御元氣が附くでせう。さあリオナイン、腕を借して上げて散歩をおし」

「いえ、小母さま、私の爲めに小母様の召使を使ひたてては濟みませぬ。」とマリナは言つた。リオナインはダイオニジアの召使の一人であつたからである。

「さあ、さあ、」と此の技巧に富んだ夫人は、何とか口實を設けて、リオナインと二人切りにしたいと思ひ、

「私はあなたの父上の王様を愛して居りましたので、貴女も愛して居ります。それで毎日毎日あなたの父上が御出でになるのを御待ちして居ります。若し王様が御出でになつて、悲しみの爲めに大層變つて御出でになる貴女を御覽になれば、私共は貴女のことを美の權化と御知らせして置いたのですから、屹度私共が何の御世話も見なかつたものと御思ひなされませう。願ひですから散歩にいらつしやいませ。そして一度快活に御なりなさいませ。老人も青年も心を奪はれる美しい御顔を大切になさいませ。」マリナは頻りに勧められるので、

「それではまゐりませう。私は少しも行きたくは御座いませんが。」と言つた。ダイオニジアは歩み去るとき、リオナインに向つて、

「私の言つた事を忘れないでね。」と言つた。——實に恐ろしい言葉である。其の意味は、マリナを殺すことを忘れてはならぬと云ふのである。

マリナは彼女の誕生の場所である海を眺めて言つた。



「吹く風は西からですか。」

「南西です。」とリオナインは答へた。

「私が生れた時は北風であつた。」彼女はさう云ふと、忽ち嵐のことや、父親の嘆きや、母の死などをむら／＼と思ひ浮べた。そして言つた。

「ライコウリダがさう言つて居たが、私の御父様は少しも御怖れにならず、水夫達に向つて、「勇氣を出せ、船員よ。」と仰有つたんですつて。そして王は御手を縄で擦り剥き、檣に確と掴つて、甲板も裂かうとする波を忍んで御受けになつたんだつてね。」

「それは何時の事ですか」

「私が生れた時のことよ。」とマリナが答へた。そして、

「其の時ほど風や波が激かつた事はないんだつてね。」と附け加へてから、猶も嵐の事、水夫の働き水夫長の口笛、船長の叫び聲などを委しく話してきかせ、

「その爲め船の騒ぎは三層倍にもなつたんだつてね。」

マリナは自分の不幸な誕生の話を、屢々ライコウリダから聞かされてゐたので、これらの事は、彼女の想像にいつも生々と浮んでゐるやうに思はれた。しかしリオナインは突然彼女の言葉を遮つて祈りをせよと言つた。

「どうしてなの」と彼女は何となしに恐怖を覺えて訊ねた。

「祈りをする爲めに少々時間が要るといふなら、待つても宜いであらう。しかし手間取つちや不可ねえ。神様には直ぐ聞えるんだからね。私や大急ぎでやつつけるつて約束したんだから。」とリオナインは言つた。

「私を殺すつもりなの」とマリナは驚いて、

「まあ、何して？」

「奥様の御吩咐でさ。」

「小母様は何うして私を殺させやうとなさるのだらう。私はこれまで一度だつて小母様に悪い事をして覚えはないわ。私は悪口を言つた事もなし、生きてゐるものには何にだつて、不親切にした事はないわ。本當に私は鼠一匹、蠅一匹だつて殺した事はない。一度なんか知らずに蟲を踏んだことがあるけど、私は氣の毒に思つて泣いてやつたわ。私はどんな御氣にさはるやうな事を爲たのだらう。」すると人殺しをしようとする男は言つた。

「私の務めは、唯やつつけさへすれや可いんで、あれこれと理窟を云ふ事はねえ。」

そして今にもマリナを殺さうとした時、突然海賊の一隊が上陸して来て、マリナを見ると、良い分捕品と計り船へ運んで行つてしまつた。



マリナを掠奪した海賊は、彼女をミテイリニに連れて行き、其處で奴隷に賣つた。彼女は卑しい身分に沈んだけれども、其の美しさと徳の爲めに、間もなくミテイリニの町中の評判となつた。彼女を買つた者は、マリナが儲けて呉れる金で大金持になつた。マリナは音楽や舞踏や刺繍などを教へて、其のもの識りで得た金は皆主人と女主人に渡した。彼女が博學で勤勉だと云ふ評判は遂に、ミタラリの大守である若い貴族、ライシマカスの耳に達した。ライシマカスは、町中の褒め者になつてゐる絶世の美人を見ようと思つて、親しく彼女の住んでゐる家を訪れた。マリナの會話を聞き彼は非常に喜んだ。此の立派な婦人の評判は知つてゐたけれども、またマリナはこの位なものであらうと定めて居た彼女が、これほど敏感で、しとやかで、善良であらうとは實に思ひ設けなかつた。彼はマリナに、倦くまでも勤勉な有徳な道を進むやう、自分も一度音づれをするやうな事があれば、それは善い報知であると言つて分れた。ライシマカスは、マリナが其の美しい容貌と上品さに合せ加へて、奇蹟のやうに立派な感情と、上品な育ちと、優れた性質とを持つてゐるのを見て、彼女を娶りたいと思ひ、卑しい身分であるにも係はらず、彼女が高貴の生れであつて呉れたらと願つた。しかしマリナは、皆に其の身分を問はれると、黙つて唯泣く許りであつた。

さてサアサスに於ては、リオナインはダイアニジアの怒を恐れ、マリナを殺したと報告した。そこで奸惡な夫人は、マリナは死んだと發表して、虚偽の葬式を行ひ、立派な石碑を建てた。此の後間も

なくペリクリイズは、忠義の大臣ヘリカナスを従へ、王女を國に連れて戻らうと思ひ、態々王女に逢ふ爲めに、タイアからサアサスにやつて來た。王はマリナが未だ赤ん坊であつた時、クリオンと其の妻に世話を頼んで別れて以來、まだ一度も逢つた事がなかつたので、亡き王妃のいとしい忘れ形見を見ることを考へて、非常に喜んだ。しかしマリナは死んだといふ事を話され、彼女の爲めに建てられた石碑を示されたとき、此の憐れなる父親の受けた不幸は非常なものであつた。王は最早、自分の最後の希望であり、愛するサイサの唯一の思ひ出である王女の葬られた土地を見るに忍びず、急いで船に乗り、サアサスの港を離れた。王は船に乗ると、不快な重い憂鬱症に罹つた。王は全く口を利かぬやうになつた。そして周圍の何事にも全然無關心になつたやうに見えた。

船はサアサスからタイアに向けて航海する途中、マリナが住んで居るミテイリニの近くを通過した。ミテイリニの大守のライシマカスは海岸から此の立派な船を認めて、如何なる人が乗つてゐるかを知りたく、其の好奇心を満す爲めに舳に乗つて船側へ漕ぎつけた。ヘリカナスは大守を町重に迎へ此の船はタイアから來た船で、其の君主ペリクリイズを乗せて又タイアに戻るところであると話した。

「この王は此の三ヶ月といふものは黙り續けで、食物も攝らず、唯嘆き續けて居られます。此の不快の原因をすつかり御話し致せば一寸面倒ですが、其の主なる原因は、愛する王女と王妃を失くせられた事なのです。」とヘリカナスは説明した。ライシマカスは此の嘆きに沈んでゐる王に逢はせて呉れと願



つた。彼はペリクリイズ王を見たとき、かつてはどんなに立派な人であつたらと思ひ乍ら、言つた。

『殿下、申し上げます。どうぞ神様の御恵みが御座いますやう！申し上げます、殿下！』しかしライシマカスが何と話しかけても無駄であつた。ペリクリイズは無言のまま、人の來たのにも氣が付かぬ様であつた。ライシマカスは不圖、あの比類稀な少女マリナの事を思ひ出した。あの乙女の優しい言葉を以てしたなら、或は沈黙の王に答をさせる事が出来るかも知れぬと考へ、ヘリカナスの承諾を受けて、マリナを呼びにやつた。マリナが、自分の父が悲しみの爲め動くこともしなで、座つてゐる船に上つたとき、一同の者は、恰も彼女が王女であるいふ事を知つてでもゐるやうに歓迎した。一同は言つた。

『立派な令嬢だ。』

ライシマカスは一同の賞讃を聞くと非常に喜んで言つた。

『彼女は實に立派な娘です。生れが立派であるといふ事が解りさへすれば、もうこれ以上選ぶ必要はなく、妻にしても非常に幸福だと思ふ程の娘です。』

それから彼は、此の身分の低い少女が、彼がさうありたいと望んでゐる高貴の生れの令嬢でもあるかのやうに、町重な言葉で話しかけた。そして彼女を愛らしく美しきマリナと呼んで、此の船に乗つてゐられる大王が悲しい嘆きの沈黙に陥られた事を話し、恰もマリナに幸福と健康とを與へる力が

ありでもするかのやうに、此の見知らぬ王の憂鬱症を癒して呉れと願つた。

『はい、御回復遊ばすやうに出来る丈けの事を致してみませう。私と私の女中の外誰も王様の御側に御寄せにならぬやう御用意を御願ひ致します。』

彼女はミテイリニでは、王の血統の者が奴隷に落ちたといふ事を話すのを痛く恥ぢて、其の生れを注意深く秘して來たが、今ペリクリイズに向つて初めて、其の身の數奇な運命と、高い身分から落ぶれたものであることを打ち明けた。彼女は自分が實の父親の前に立つてゐるのを知つてでもゐるやうに、其の語る言葉は皆彼女の嘆きを語る言葉であつた。しかし彼女がかう云ふ事を話し出した理由は不幸な人の注意を惹くには、其の人の不幸にも匹敵するやうな悲しい不運の物語をするに如くはないと知つて居たからであつた。彼女の優しい聲は、うな垂れてゐる王を目覺した。彼は目を擧げて長い間凝乎と彼女を見詰めた。亡き母親そつくりのマリナは、驚嘆してゐる王の眼には、亡き王妃其の儘の面影として映つた。長い間沈黙を守つて來た王は遂に口を開いた。

『余の愛する妻は』と目醒めたペリクリイズは言ひ出した。

『この娘の通りであつた。娘も定めしこんな娘であつた事だらう。王妃のやうな角額、杖のやうに眞直で、そつくりの脊丈、銀鈴を振るやうな聲、眼は寶石のやうだ。若い娘よ、お前の家は何處だ。お前の家柄を話して呉れ。お前は酷い目に逢つて落ぶれたさうだがお前と予との不幸くらべをしたら、



お互に同じ位の不幸さだらうと言つたやうだつたね。」

「そのやうな事を申し上げました。ですが唯さうだらうと確信してゐる丈けの事を申し上げたので御座います。」

「それではお前の話をしよ。お前が余の苦しみの千分の一でも味つたといふ事が分れば、予は小娘のやうに辛棒したのだし、お前は男のやうに悲しみに耐へたのだといふ事が云へる。しかしお前は王の墓を眺めて立つてゐる忍耐の像のやうだね。そんな事を味つた覚えのないように、微笑してゐる困窮の神のやうだね。お前名前を聞かせて呉れ、深切な少女よ。お願ひだ、お前の身の上話をして呉れ。さあ予の傍に座りなさい。」

ペリクリイズは少女の名がマリナであると聞いて非常に驚いた。と云ふのは、かう云ふ名は極めて珍らしく、「海で生れた」と云ふ事を表す爲めに自ら考へて、わが子に付けてやつた名前であつたからである。

「お、予は嘲弄されてゐる。お前は、世人に予を嘲笑せざる爲めに、或る怒りの神からここに遣されたものぢやな。」とペリクリイズは言つた。

「殿下、どうか御辛棒遊ばせ。でなければ私は茲で止めなければなりません。」

「いや、いや。辛棒をしよう。お前が自分の名をマリナと言つたので、予がどれ程驚いたかは御前

には分らぬ。」

「其の名前は、多少は権力を持つてゐる父、或る王様によつて附けられたもので御座います。」

「何、王の娘だと！そしてマリナといふんだね。だがお前は生きてゐる人間か。妖精ぢやあるまいね。さあ話して呉れ。何處で生れたのだ。何故マリナといふのだ。」

「私は海で生れましたので、マリナといふので御座います。私の母は矢張り王様の娘で御座いましたが、私を産みますと直に死んだので御座います。深切な乳母のライコウリダがいつも泣き乍ら話して呉れました。私の父の王は私をサアサスに残して置きました。とう／＼クリオンの残酷な妻が私を殺させようと致しました。恰度其の時海賊の一隊がやつて来て私を救ひ、ミテイリニに連れて來ました。ですが殿下、何故御泣き遊ばすので御座いますか。多少私を欺瞞者と御思召すでせう。けれども私は、若し深切なペリクリイズ王が生きて居られましたら、本當にペリクリイズ王の娘なので御座います。」

ペリクリイズは餘り突然な喜びに仰天し、またそれが果して本當だらうかと疑ひ、大聲で侍臣を呼んだ。侍臣は愛する王の聲が聞えたので非常に喜んだ。王はヘリカナスに向つて言つた。

「お、ヘリカナス、予を打つて呉れ、傷けて呉れ、直に苦痛を與へて呉れ、予に押し寄せて來た喜びの大波が、予の生命を奪ふと不可ないから。お、海で生れてサアサスに送られ、再び海で見附け



た娘よ、こちらへお出で。お、ヘリカナス、跪いて神に感謝を捧げて呉れ。あれはマリナだ。娘よ、お前の上に幸福があるやうに！ヘリカナス、余に予の新らしい着物を持つて来い。娘はサアサスで、野蠻なダイアナニアの手にかかつて死ぬるところを、死なないで居つたのだ。お前が娘の前に跪いて、王女様と呼びかけたら、娘は委しいことを話してきせるだらう。これは誰ぢや」初めてライシマカスに氣が注いたのであつた。

「申し上げます。これはミテイリニの大守でございます。殿下の御不快を承り、謁見にまゐりました」とヘリカナスが答へた。

「予は喜んで御目にかかりませう。予の上衣を持つて来い。そしたら予は見よくなるだらう——お、神よ娘を恵み給へ。おや、あれを御聞き！あの音楽は何だらう——ある深切な神が奏でてくれるのか、それとも嬉しさの餘りのそら耳か、王は静かな音楽が聞えるやうに思つたのであつた。

「殿下、私には何も聞えませぬ」とヘリカナスは答へた。

「何も聞えない？あれは天體の音楽ぢやないか。」

しかし何の音楽も聞えぬので、ライシマカスは、急激な喜びの爲めに王の理性が狂つたのだらうと推して、密かに言つた。

「あらがふのは宜しくない。勝手におさせ申さう。」

そこで一同は音楽が聞えると言つた。王はまた頻りに、眠氣がさして來るところぼすので、ライシマカスは王に勧めて長椅子の上に休ませた。王は過度の喜びの爲めに壓倒されて、枕を當てると直ぐに深い眠りに就いた。マリナは父親の眠つてゐる長椅子の傍に黙々として座り、これを見守つてゐた。

ペリクリイズは眠つてゐる間に夢を見た。此の夢の爲めに彼はエフィサスに行かうと決心をした。其の夢といふのは、エフィサス人の女神であるダイアナが彼に現はれて、王にエフィサスにある女神の寺院に詣で、祭壇の前で王の身の上話と不幸の物語をなすやうに命じ、猶ほ女神の命令通りに行ふときは、王は稀に見る幸福を得ることを、女神の銀の弓にかけて誓つた夢であつた。王は不思議なほど爽快な心持になつて眠りから醒め、その夢のことを話して、女神の吩咐け通り行ふ決心を語つた。

ライシマカスは、ペリクリイズ王に、上陸して、ミテイリニで出来る丈けの待遇を受け、元氣を回復されるやうにと招待した。ペリクリイズも此の深切な申出を受け入れて、一兩日ミテイリニに滞在することに定めた。この滞在の間にミテイリニの大守が、其の身分が未だ不明であつた時分から深く尊敬してゐた愛するマリナの父である王を歓迎する爲めに、如何なる宴會や娛樂を催し、また如何に立派な見世物や余興を行つたかと云ふ事は想像に余りある。またペリクリイズはライシマカスの求婚に對しても悪い顔をしなかつた。といふのは王女がまだ卑しい位置にある時分から彼女を深く尊敬し、マリナの方でも彼を憎からず思つてゐる事を知つたからであつた。王は承諾を與へる前の一條件と



して、彼等も共にエフィサスのダイアナの寺院に詣でて呉れるやうに申し出た。そこで三人は、その後間もなくエフィサスの寺院を指して航海の途に就いた。ダイアナの女神は自ら豊かな風を帆に孕ませたので、数週間の後には、無事にエフィサスに着くことが出来た。

ペリクリイズを初め一同がダイアナの女神の寺院に遣入つたとき、恰度祭壇の傍に、ペリクリイズの妃であるサイサを蘇生させた深切なセリモンが（今はいたく老けて）立つてゐた。サイサも今は寺院の尼僧となつてゐたので、祭壇の前に立つていた。ペリクリイズは王妃を失つた長い間の嘆きに、其の面影も變つてゐたけれども、サイサには夫の顔が分るやうに思はれた。王が祭壇に近づいて、ものを言ひ始めたとき、サイサは其の聲に聞き覚えがあると思つた。彼女は余りの不思議さと嬉れしさに呆氣にとられて其の言葉を聞いた。ペリクリイズが祭壇の前で述べた物語は次のやうであつた。

「申しダイアナ様、あなたの命令を果す爲めに、タイアの王である私は、茲に告白を致します。私は國をのがれまして、ペンタポリズで美しいサイサと結婚を致しました。彼女は航海の途中、産褥に就いて死にましたが、其の時マリナと呼ぶ王女を産みました。王女はサアサスでダイアニシアに育てられました。彼女が十四歳になつた時、危く殺されやうとしました。しかし彼女は運よくミテイリニに伴れて行かれ、恰度私の船が其處の海岸を通ります時に、運よくも此の娘が私の船へまゐりました。彼女はいろ／＼の事をはつきり覚えて居ましたので、自分の娘であることが分つた次第でありま

す。」

サイサは夫の言葉を聞くに感極まつて、それに耐へることが出来ず、

「おゝ貴方は、貴方は、ペリクリイズ王でいらつしやいますね。」と叫んで氣絶した。

「此の婦人は何うしたのだ。」とペリクリイズは言つて、

「死んでしまつた。皆さん早く助けて遣つて下さい。」

「閣下」とセリモンが云ひ出した。

「若し貴方様が祭壇の前で語られた事が本當で御座いましたら、此の婦人は閣下の奥様でございます。」

「御立派な紳士、さうではないのです。私はこの自分の手で、妻を海に投げ込んだのですから。」とペリクリイズは答へた。そこでセリモンは、ある嵐の朝早く、此の婦人がエフィサスの海岸に打ち上げられた事、其の棺を開けて見て貴重な寶石と紙片を見出した事、幸福にも此の婦人を蘇生させる事が出来、ダイアナの寺院に入れた事などを物語つた。そして氣絶から回復したサイサは云つた。

「おゝ殿下、貴方はペリクリイズではいらつしやいませんか。御聲と云ひ、御様子と云ひそつくりです。貴方は嵐の事や、誕生や、死の事を御話しになつたのでは御座いませんか。」  
王は驚いて叫んだ。



「死んだサイサの聲だ！」

「其のサイサは私でございます。死んで溺れたと思はれておりました。」とサイサが答へた。

「あゝ有難いダイアナ様！」とペリクリイズは敬虔な驚愕の念に打たれて叫んだ。するとサイサは「段々貴方であることがよく分つてまわりました。貴方の指の其の指環は、私共が涙と共にペンタボリスで父に別れるとき、父王が貴方に差し上げたもので御座います。」

「もう澤山です、神様！神様に頂いた今の此の喜びに比すれば、過古の不幸は遊戯のやうなものです。さあサイサ、も一度此の腕に抱かれて呉れ。」

「私の心は早く母上様の胸に抱かれたいと跳ります。」とマリナが云つた。そこでペリクリイズは娘を母親に引き合せて云つた。

「ここに跪いてゐるのが御前の親身の娘だ。海での重荷だつたのだ。海で生れたからマリナといふのだ。」

「娘の上に祝福がありますやうに！」

サイサはさう云つて、あまりの嬉れしさにわが子に抱き付いた。ペリクリイズは祭壇の前に跪いて云つた。

「清きダイアナ様、夢を御告げ下さいました事を御禮申し上げます。私はお禮に毎晩お供物を致します。」

す。

ペリクリイズは此の場で直に、サイサの承諾を得て、貞淑の王女マリナを、それに比して恥かしくないライシマカスの妻とする嚴肅な約束を取り行つた。

このやうにして人々は、ペリクリイズと、其の王妃、王女に、災難で試練された立派な徳の模範を見ることが出来た（神の御心の苦しみを受けて人は初めて忍耐と節操とを教へられる）それはまた同じ神の導きに依つて、ついに機會や變化をもともしない成功の域に達するのを見た。ヘリカナスは又、眞實と誠實と忠義の立派な模範を示した。彼は王位にも即けるところを、曲つた事をして偉大にならんよりはと、正當なる王を呼び寄せて位に即かせたのであつた。サイサを蘇生させた立派なセリモンを見て、智識で磨かれた深切といふものは、どんなに神の性質に近いものであつて、人類に利益を與へるものであるかといふ事を教へられる。最後に語る話はクリオンの悪い妻であるダイアナエジアの事であるが、彼女は其の悪事に相當する最後を遂げたのであつた。サアサスの住民達は、マリナに對する彼女の残酷なる計畫を聞いたとき、恩人の娘の仇を打つ爲めに、一舉してクリオンの邸宅を襲ひ、それに火を放つて、クリオン夫妻及びあらゆる家財を焼いてしまつた。邪惡なる人殺しが、假令それは企てただけで、實行することは出来なかつたとしても、其の極惡非道に相當した方法で罰された事は、神も嘉し給しふた事であらう。





大正十五年九月十日印刷  
大正十五年九月二十日發行

【定價金貳圓參拾錢】

エッセイスキヤ  
物語

發行所

東京市日本橋區數寄屋町一番地  
株式會社

春

秋

社

振替東京二四八六一番  
電話大手二二二四番

著作者	中村詳一
發行者	神田豐穂
印刷者	本間十三郎
印刷所	清揚社

東京市日本橋區數寄屋町一番地  
東京市日本橋區數寄屋町一番地  
東京市日本橋區數寄屋町一番地  
東京市日本橋區數寄屋町一番地



# 世界家庭文學名著選

フアラア著 全三譯 家庭 定價參圓五拾錢 送料拾八錢

マロツク著 シヨン・ハリファツクス 上・下 定價各貳圓參拾錢 送料各拾六錢

オルクott著 全四譯 少女 定價貳圓七拾錢 送料拾八錢

ルツ初之輔著 全一譯 エミール 上・下 定價各貳圓七拾錢 送料各拾八錢

シエンキキ著 全一譯 何處へ行く 上・下 定價各貳圓拾錢 送料各拾四錢

本間久雄選 家庭學校用 劇と對話 定價貳圓五拾錢 送料拾八錢

アミール著 全一譯 クオレ (學童日記) 定價壹圓九拾錢 送料拾四錢



517
378



終